

自然&生きものたちと親しむ法

Method to coexist with Nature and Creatures

岩崎行伸

地球の自然を大切にし、自然とともに共生しようとする心は自然の理解力から始まる。自然を知らず、自然の中に入らない人は、自然の美しさも、大切なこともわからない。例えば、都会で育ち、都会で生活している人が、山に登って可憐な高山植物を見つけると、すぐ欲しいと思ったり、持って帰りたいたいと思ったりして、花を折ったり、むしったりする。その高山植物が、どうしてそこに咲き、どのような苦難に耐え、高山を背景としたその山頂に咲いてこそ価値のあることを理解できないのである。自然の中に入り、幾つかの植物を観察し、その名前を覚え植物と親しみをもってこそ、始めて植物を愛する心が芽生える。



図1、清流における生物採集と種の確認（清水/塩田川）

草花の多い緑も多い農村や山村に育った人たちは、教わらなくても自然を愛する心、自然を大切にする心が養われて、無用に植物をむしることはない。子ども頃から、植物・虫も友達、いつもそれに囲まれて生活してきて、人間に直に害なもの以外は、敵視することもなく、自分だけで占有する気をもつこともない。

森や林の中に入って、野鳥や野生動物や昆虫の生活を自然の中で観察することは非常

に意義あることである。しかし、わが国のように野生動物が少ないところでは中々その機会がなく、野鳥の鳴き声を聴くことはあっても、姿を見つけるのは難しい。しかも野鳥の多くは元気よく囀るのは、早朝まだ薄い時であって、姿まで観察することはできない。



図2、清流における生物採集と種の確認（清水/庵原川口）

観察の手段としては飼育することしかない。野鳥はかなり広い生活区域をもっているので、野外と同様な行動を観察しようとするれば、広い飼育室が必要で、このように生き物を飼育することが自然保護と無縁なものとは考えない。野鳥を無断で捕獲することはできないが、今のところ野鳥を捕獲するには市の届け許可が必要である。

昆虫は小さい籠の中でも飼うことができる。昆虫の成虫は一般には寿命が短いから、自然の一助として考えるならば、幼虫から飼育することである。毎日葉をとりかえたりしているうちに、幼虫は目に見えて大きくなる。子ども頃、毛虫を飼って蝶にまで育てた経験のある人は、生涯蝶への興味を失わないという。蝶が舞っていれば、もうこの時期になったかという自然の移りを感じ、飼育した頃の思い出が蘇り、蝶に対する愛着も深まることであろう。

このように、自然の中で遊び触れ合った楽しい思い出は何時までも心に残り、後日になっても時どき思い出される。その時の思い出は、特に写真アルバム（フィルム）・DVD・携帯デジカメ等に残しておくこと、それを眺めるたびに場面が蘇ってくる。

参考文献

- 1) 野鳥小図鑑 (1987) フィールド図鑑、高野伸二著、東海大出版会
- 2) 野山の昆虫 (1990) :ヤマケイポケットガイド⑩、今森光彦著

添付資料

図 1. 生き物採集確認 (清水/塩田川中流。東海大学水棲環境研究会提供)

図 2. 生き物採集確認 (清水/庵原川河口。東海大学水棲環境研究会提供)

自然観察入門--Ⅲ : 日本野鳥の会・自然観察研究会・昆虫写真研究会